
ブラックホール・ダウン

oimori

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックホール・ダウン

【Nコード】

N3211V

【作者名】

oimori

【あらすじ】

日常的非日常の中の日常系非日常。

感想などありましたら是非お願いします

一話

「いつてきます」

早朝の空にはまだ太陽の姿は無く、それでいて薄い紫色の光が淡く差している。しばむ目を擦りながら玄関を出て、自転車に跨る。ここまでではいつも通り。

立ち漕ぎで軋むペダルを気にしながらそのまま駅、には向かわず、二、三キロほどの距離にある山を目指す。途中で新聞配達バイクに追い抜かれ、むきになって追いかけて、あっさりと負ける。バイクのおじさんのドヤ顔もいつも通り。

だんだんと街の中心へ近づいていく。住宅街は減っていき、逆に商業施設が増えていく。駅もこの方面にある。途中にあるさらさらと流れる川は、かつて友人達と魚を釣ったり泳いだりして遊んだ場所だ。少し速度を緩め、橋の上から川の中を覗きながら進む。大きな鯉が、ゆつくりと体をくねらせ、下流へと向かっていく。しかしその姿を見送り終わる前に、この川と別れることとなった。前を向きなおして、再び進む。

道はここで二手に分かれている。一方はこの街の人の中心部。それが先述の駅である。その周囲は常に活気に満ち満ちていて、例え未明のこの時間帯でも、人々は一日の準備のために努め、この街を動かすエネルギーを生産しているのだらう。それが彼らのいつも通りだからだ。

しかしもう一方の道は違う。その道は明らかに街の中心部に向かっているのにも関わらず、進めば進むほど周囲は閑散としたものに変わっていく。人家は減り、伴って人の姿も薄れていく。そして、その道は坂道だった。晴見山が鬱蒼とした空気に包まれているのは、無論いつも通りのことである。

えっちらおっちら自転車をこいで山の頂上まで登ったなら、自転車を傍らに停めて、展望台にある望遠鏡を覗く。そこまでもいつも通り。

そこから見える光景。空の上はまだまだ夜が抜け切っていないが、東の方はもう赤く色づいている。街を見渡せば、小さな住宅たちが立ち並び、中心に大きな駅があり、その向かいに大きなデパートがある。既に道路には種々の乗用車が走っている。並んで聳えているマンションは、うつすらとその影を街へと伸ばし始めていた。そして、北北東の地平線。朝靄の向こう側には、真っ黒なドームの天井。そう、いつも通りの光景だ。

こうして毎朝、俺はこの街の風景を眺めている。自分が育った街をこうして眺めることで、体に気合を入れているのだ。運動不足の解消にもなるし、良いことづくめの行為であるだろうと自負している。

「よし」

気合を入れるように一言発した後、幼馴染を迎えに行くために自転車に飛び乗った。

二十一世紀は科学の時代である。先進国に生きる人間はこのフレーズに疑問を持つことはないだろう。二十世紀からの産業革命の流れを汲む資本主義社会は、科学の恩恵を工業製品を通して人々へと浸透させた。しかし、それ以外の人々はどうだろうか？物質社会が行き届いていない世界では？「科学」の席卷は、あくまで北半球の一部を発端とした出来事に過ぎないのではないだろうか。

二十一世紀は科学の時代である。それが全人類の共通見解になったのは、ある日をきっかけにすることだった。

日本素粒子研究所爆発事故。

NASA、アメリカ航空宇宙局にして、「かつて人類が引き起こした事象の中で、最大にして最悪のものである」とまで言わしめた、人類史上稀に見る大厄災である。

政治不信、自然災害等で、ボロボロとなった「技術立国」の名。日本素粒子研究所は、べつとりと染み付いたその汚れを雪ぐ為に設立された、世界最大の研究所かつ実験所だった。CERN、欧州原子核研究機構、に習って作られた巨大な粒子加速器は、日本に到来した新たな時代を予感させ、大いに国を奮い立たせた。

マイクロブラックホール生成実験が行われたのは、ある年の春だった。実験に携わっていた研究者たちは、その最中に異常を感じた。一瞬で構内に響き渡る警報音。一人の職員が、緊急停止ボタンと、反応抑制装置のボタンを押した後、それは発生した。

一瞬でそのサイズを拳大まで成長させたブラックホールは、周囲の物質を飲み込むことで加速度的に巨大化し、施設の壁を突き破り、そのまま人を飲み込み、勢力の拡大を続けた。

結果、職員全員と周辺住民、合わせて二百万人以上の人命が一瞬で奪われた。

「早ければ百二十時間、遅くても一週間以内に、地球はその形状を保てなくなるレベルまでその質量を欠損するでしょう」

未だにその拡大を続ける黒球。衛星写真を背に、報告書を片手に、NASAの職員は冷や汗を流しながら発表を行った。

世界はこのニュースに大騒ぎとなった。ある宗教家は人類の原罪にその所以を求め、ある政治家は公然と日本人のことを「所詮機械も碌に扱えないサル」と呼

んだことによつてその職を引きずり降ろされそうになった。世界が終わるという名目の元、モラルや希望は意味を成さなくなり、強盗殺人等の殺人件数が飛躍的に増え、自殺する人間も大量に現れ始め

た。

収まりつつあった民族紛争は再燃の煙を上げ、ある核保有国は出来たばかりの核ミサイルを最後に一度使ってみようといわんばかりに大量配備の準備をした。

世界は名実ともに混乱し、その終わりを迎えようとしていたのだ。

自転車を家に置いてきた後、二分ほどの徒歩移動。

インターホンを押すと、「とんとん」、という音が漏れてきて、それが「だんだん！」という音に変わって行き、そのままドアががちゃりと開く。

「おーっす」

耶麻、と書かれた表札を前にして、その向こうの玄関から覗く顔に声をかける。

「おはよ」

短い言葉が返ってくる。だが、それは億劫さからくるものではないらしい。彼女の顔の綻びが、それを教えてくれた。

「行こう」

体の向きを駅の方へと変える。ちよつとまち、と言った彼女は、玄関扉に首を突っ込んだまま、いつてきます。

「みつちゃん、氣い付けなさいよー」

ここまで響くような声が家の中から返ってくる。

「わーてるつつつの、かーさんったら」

頬を膨らませながら赤くしている。みつちゃんは器用だなあ」

「うっさい」

おっぷす、口に出してしまった。

では、日本はどうなったのだろうか。

国民の避難は迅速に行われようとした。海外便のチャーターから、特別ビザの発行など、おそらくその時点において最高の対応をしていたのではないだろうか。

しかし、その全ては頓挫した。

地球規模の事故を起こした日本という国家に対する信用は、まさに地の底にまで落ちてしまったのだ。更に言うならば、日本人そのものに対する差別が起こってしまった。特に、十二分にメディアの網が行き届いている、欧米の先進諸国でそれは顕著となっていた。先に述べた失言政治家も、世間の対日感情の変動に伴って支持を集めてしまうほどだった。そういった国々は得てして、ちょうど日本人が避難先として望んでいた、先進的かつクリーンな場所でもあった。ジャーナリズムの名の元、一足先に国外逃亡を果たし、北欧の安住の地でどっしり構えようとしていたとあるテレビ局のクルーは、日本人であることがばれると同時に、周囲の住民に袋たたきにされるという一部始終を、衛星で中継してしまった。それをまざまざと見せ付けられ、退路を失くしたと悟った日本人たちは、その地に残らざるを得なくなった。終わりの始まりであるその地に。

「なあ」

俺の声に、彼女は「ん?」、と良いながら首を傾けた。

「今日、お前のお父さんの声聞こえなかったけど、どうしたんだ」

「ああ、そのこと」

彼女はくすりと一笑い、そのまま前を向きなおしてから答えを言う。

「昨日の夜からアメリカに出張。一週間くらい向こうにいるってさ」
その言葉は別段異常なものではなかったのだが、少し気がかりな点がある。

「出張、それもアメリカかって、つい先月も行ってたじゃないか」

彼女はゆつくりと首肯して、あきれた、といわんばかりにため息を吐いた。それはかつて、俺が彼女の家でしたいはずらがばれてしまい、泡だらけの姿のまま物置から出ることとなった俺の姿を見た彼女のお母さんの顔とぴったりと重なり、やはり親子なのだろうとか、恐らくお母さんも幾度と無く同じ表情をしていたのだろうと思ってしまった。

「単身赴任しなだけマシなんだろうけどさ、これだけ頻繁に家を空けられると、やっぱり喜びより不安のが勝っちゃうなあ」

「お前、喜びなんて感じてたのか」

「ん、少しだよ。家って男はお父さんだけだからさ、そのための気配りをお父さんがいない間はしなくて良いんだもん」

なるほど、それは確かに気が楽かもしれない。まあ、年頃の娘は気難しいとよく言われるものなのだから、この程度の「迫害」ですんでいる彼は、かなり幸せ者のの部類に入るのだろう。惜しむらくは、その彼女と頻繁に離れなくてはならないということだろう。

「まあ、」

ここいらでお父さんの擁護をして、後々のポイントを上げておくのも悪くは無いだろう。

「アメリカって一口で言っただって糞広いからな。面積が日本の25倍だっけ？」

うん、と彼女は答えるが、しかし次の言葉は俺の援護射撃を迎撃するものだった。

「でもね、行く場所は変わんないの。前回も今回もヒューストンなんだよね」

「……ヒューストン、か」

ケネディ宇宙センター。世界屈指の先端科学技術が結集する、最高

峰の研究施設であろう。そういえば、かつて世界の三大科学技術施設と言えば、アメリカ空軍、ヨーロッパのCERN、そして日本の日本素粒子研究所とされていた。多分これは国際的に認められていただろう、と思う。ちなみにNASAはアメリカ空軍の中に含まれる。今となつては三つ目にDARPAが入っていて、アメリカが2/3を占めることとなっているが。

しかし、そこに何度も向かう彼女のお父さんは一体何者なのだろうか、と勘ぐることはかつてもあった。が、その度に彼女は

「判んないんだよねー。本人はそんな大したもんじゃない、って言い張ってるけど」

「お前、俺は何も言っていないぞ」

「顔が完全にパターン化されてるんだもん。条件反射だよ条件反射」と、この調子なのである。それでも彼女は真剣な面持ちで知らないというのだから多分そうなのだろうが、彼女のお母さんに関しては意図的にそれを隠している節が見受けられる。

全く、気になって仕様が無い。

これらの一連の知識は、高校生ならば入学式の直後に詰め込まれるようなレベルのものだ。国語科目でも、数学科目でも、社会科目でも、理科目であつても、開始から三時間分ほどはこの話で埋まってしまう。大学に進学すれば、専門的にこれらの事象を学ぶ機会も用意されている。ここからも、この事故の規模の大きさがうかがい知れるだろう。「彼」もそんなに成績の良い生徒ではないのだが、ある程度のことならば一般常識として学んでいる。

だが、幾つかの人はこの状況に疑問を持つかもしれない。

それほどの事が起きたというならば、何故高校などというものが残るような、余裕があるのだろうか、と。

実は、状況は当初から大きく、もっともそこに生きる人間からすればそうでもないが、変わっていたのだ。

発生から七十一時間後、ブラックホールは既に消滅か、その勢力を極小にしていると推測されるような状況となった。裏返せば、ブラックホールによる直接の危機は去ったということになる。

では、何が今危機となっているかと言えば、ブラックホールによって副次的に発生した、「虚数空間」だ。

とはいっても、物理的な問題で言えば両者は大違いなのだろうが、先述の通り、そこに住む人間からすれば大差はないのだ。シュバルツシルト半径が、虚数空間との境界面に変わったというのは、「生命の危機」を前にして、大きな違いを持たない。

唯一体感できる違いがあるとすれば、その破滅が先延ばしになったということくらいだろうか。ブラックホールが健在していた頃のような加速度的な拡大は収まり、虚数空間はその余波であると言えるだろうか。その余波も時を経ることに弱まっている、と主張する学者も存在する。一種の猶予が与えられたのは、そのお陰と言えるのではないだろうか。といっても、あくまで「猶予」なのではあるのだが。

そして、最大の安心点があるとすれば。

この事故が発生したのは、今から三十年近く前である、ということである。

二話（前書き）

迷い

二話

彼女は、それは楽しそうに話を続ける。先ほどのやや湿っぽい話を忘れたかのように。

実際にはそんなことはないのだろうが、それでも、なにか思うところがない訳ではない。

「美知はさ」

俺はなんとなしに、思ったことをそのまま口にする。

「強いよな」

唐突な言葉にキョトンとする姿は、わざわざ目を使って確認するまでも無くひしひしと伝わってくる。

「何さ、突然。つーか、あんたより強いのは当然でしょ」

彼女の顔が、冗談を言うとき特有のしたり顔へと変わる。えっへっへ、と笑うたびに揺れるポニーテールは、その有り余る元気を主張している。

俺は、彼女のポニーテールが好きだ。トレードマークとして馴染み深い、というのもあるのかもしれないが、いま最もそれらしい理由として上げられるのは、それを通して彼女の気持ちを量ることが出来るからだ。感情の揺れ、とでも言うのだろうか。喜んだときにはふわり、と綿のようにそよぎ、悲しみに涙を流すときには、荒れ狂う嵐のように、それは激しく揺れるのだ。気のせいだ、といわれればそれまでだが、この考えにそれなりの信憑性があるように感じられるのは、俺の驕りなのだろうか。

とにかく、彼女のポニーテールには、いつも、いつでも、嬉しそうに揺れていて欲しい。

そう思ったから、何故彼女が「強い」と思ったのか。それを言うのは止めた。

駅まで歩き、電車に乗って、降りたら学校へとまた歩を進める。そうして彼女と一緒に昇降口をくぐるのだが、教室に入るときには最後の扉それぞれから別に入る。

それは以前彼女との仲を疑われた際に、その対策として打ち出した策だった。彼女、美知との距離をある程度に保つための仕切りのような役割も有るのかもしれない。こんなこと何でやってんだろう、そう考えることも無くは無い。とにかくそれは、ただ体裁の維持のためだけのものだった。

俺はいつも通りに教室の後ろのドアノブを捻る。開いたドアから三番目が俺の机。その周囲には、いつも通りの面々が顔を突き出し足を突き出し、なにやらワイワイやっていた。

「はよ、何やってんだよ」

近づいてみると、どうやら集まりの中心は俺の一つ後ろの席だったらしい。流石に無人の机が囲まれるなんてことはなかったようだ。集まりの一人がこちらに気づき、おはようと返してくれた。

他の人も彼のお陰で俺を見つけてくれたようで、振り向いて挨拶をしてくれた。やはり、あいさつは気持ち良い。

「で、どうして甘上の周りでキャンプファイヤーしてんだよ」

この発言の何が面白いのかというと、一つの机の周りを円を描くようにぐるりと囲んでいる姿をキャンプファイヤーという暗喩でさらに表現したこのテンポの良さなのである。

「それがな、今日テストがあるじゃない？」

そんな俺の小細工は、ほんの隠し味程度の弱オカマ口調に打ち消されてしまう。

あまりにもあつさりと流されてしまったというショックと、どうにも脈略がないように感じられたという不可解さから、

「……それがなんだよ」

と、少々キツめの言い方になってしまった。

そんなに怒るなよ、とオカマ口調の和寺コウが宥めてくる。

「あれって、内容が特殊じゃないか」

「ん？」

真面目、とまではいかないが、それでも一旦先ほどまでの流れを区切るかのように口調を改めたコウに合わせ、俺もテンションを切り替える。

「ああ、『国が定めた虚数空間に関する理解うんたら』だかつてやつたろ？」

中学に入ってからだが、毎年この季節になるとそういった内容のテストが実施される。どうやら全国で一斉に行われているものらしいのだが。

「あれはいちいち勉強したりだとか、警戒するようなもんじゃないだろ？だって……」

「成績には入らない、はずだったからな」

「はずだった？それは、つまり。」

「いやな、俺も今朝聞いたばかりなんだけどよ、もしかしたらあのテストの得点、成績に入れるかもしれねえって話なんだよ」

な、なんだってー、というのは実際には非常に文語的な表現ではないかと思う。実際問題本当に驚愕したときは思わず無言になってしまつか、

「はあ!？」

と大声で叫んでしまうのではないだろうか。

だが、こうして驚いたのはどうやら俺が初めてではないらしい。キヤンプファイヤーを構成するまた別の一人、尾枝が慣れた口調で説明をしてくれた。

「アホな先生の一人がな、『こんのテストは、学習意欲の調査にうってつけた、十二分に平常点として評価されるべきだあ!』だとかなんとかのたまったらしいぜ」

『』の中の台詞は、それこそ個人が特定できるレベルの物まねで言ってくれた。どうして発言元までわかるのだろうか。ひよっとした

ら、相当尾ひれが付いているのかもしれない。

「しっかし」

結局彼らと一緒に勉強を始めることにした。備えあれば憂いなし、ということだ。

「いくら高二だとはいえ、やっぱり範囲、広すぎだろ」

そう、広い。学校の授業の初めが「穴」の話題で埋まるというのは、その特殊性のみに因るものではないのだ。

二つほど前だったか、その時の総理大臣が、穴に対するとんでもない失言をした。そのとんでもなさたるや、空飛ぶスパゲッティモンスター教を生命創造の本質であると本気で考えているのと同じくらしいレベルであった。

当然支持率は垂直落下、それと同時に穴に対する関心が垂直上昇したのだった。

無論それは教育の面にも波及し、公表こそされていないが「穴」に関する授業が一単位にされているのでは、と言われるほどに内容が強化され始めたのだ。

おかげで昔は○×形式のアンケートのような気楽なものだったのに、いつのまにか五十分×二時限、記述問題てんこ盛りのおぞましいものになっていった。

そもそも、一体何なんだ虚数空間。よく判らない。どうやら某汎用人型決戦兵器の巨大人造人間が奇怪な化け物と戦ってひたすら哲学するというアニメに出てくる「ディラックの海」とやらが一番イメージとしては近いらしいが、そんな特定の人間にしかわからない例えを教師がしていいのだろうかと思ったことがある。まあ確かに、その後見せられた某汎用人型決戦兵器を取り込んでいく「ディラックの海」の姿は、なるほど虚数空間に重なるものがあつたのだが。ところで、そんなに現実と重なる創作物があるのだから、その話の中での解決策を応用してみれば良いじゃないか、という提案をしたことがある。しかし、

『そのためには現存する核弾頭を全てそこに投入するか、もしくは200m級の人造人間を一旦取り込ませた後、暴走させる必要がある訳なんだが、お前、どっちが実現可能だと思う?』

『どちらも無理です』

『そうだ。前者は政治的な理由で、後者は技術的な理由で無理だ。

つまり、そういうことだよ』

と、アニメは所詮アニメである、という現実を叩き込まれた訳である。

「おまたせ」

「ん、だいじょぶだよ」

掃除を終わらせて校門に向かうと、彼女は先の言葉通り待ってくれていた。もつとも、これ自体は特別な事ではない。この学校は運動部が非常に盛んで、引き換えとして文化部が異常に少ない。それらもほとんどは同好会どまりで、しかも個人的な趣味によるニッチなものばかり。運動が苦手な俺は、必然的に帰宅部を選ぶこととなった。

その点、美知は運動神経抜群と評されるようなタイプの人間だ。小学生の頃は陸上選手として目覚しい活躍をしていたし、高校の入学も陸上一本で決められるのでは、と中学時代の友人や先生達に思わせるほどだった。この学校に来て彼女が部活に入らない理由は、どうやら俺にあるらしい。

決してそれが驕りだの思い込みだの自意識過剰だのとは考えていない。それどころか、なんとなくではあるが、自分と彼女の関係はのっぴきならないものに近いのではないかと幾度と無く考えたことはあるのだ。だが、それらは具体的な内容として実りはしなかった。

教室への侵入でひとつ距離を保っているように、どうにも越えることが出来ない一線というのが存在しているように感じる。よくある話だが、幼馴染という関係はどうしてなかなか体に染み付いてしま

っているようだ。

見上げた空は青く、その端には穴がある。それは一見して当たり前
の光景に感じるが、思考を組み立てていけば疑問に突き当たる。人
間の認識というのは、生得的要素に深く依存しているのだろう。

そうすると、彼女がああして校門で俺のことを待ってくれていたこ
とも、決して「当たり前のこと」ではないのかもしれない。

ああして確固たる存在感を伴って周囲を侵食していく「穴」だって、
数十年前には微塵も存在していなかったのだ。

彼女とともに登校した。彼女とともに学校で学んだ。彼女が俺を待
ってくれた。そして、彼女とともにこうして帰っている。

そうしてどうにもそれが当たり前前に感じられなくなったとき、俺の
背筋にヒヤリと何かが通った。

既に桜は緑一色となり、並木から聞こえる虫の音も、季節が夏に着
実と近づいていることを教えてくれる。

そんな世界とは裏腹に、コンクリートで舗装された駅への道を歩き
ながら。

今日のテストはどうだったかだの、宿題がどうだの、今欲しいもの
だの、他愛も無い話がのりくらりと続く。この話も、そういった
類の一つであった。

「朝のニュース見た？」

「ん？」

彼女からの突然の質問であった。が、それが何を指しているかはす
ぐに察しがついた。彼女が毎朝見るようなバラエティー風ニュース
番組は、今朝の編成の八割をそのことに費やしていたからだ。

「ヤッシーのことか」

「そー、もうね、本当にかわいそうで仕方無いよ」

ヤッシーとは、ここから五十キロほどの場所にある動物園にいる、
いや、今となつては「いた」だが、巨大な力バのことである。彼女
と一緒に何度もその姿を見に行き、そのなんとも言えないでろーん

とした覇気の無い顔には、様々な感想を持ったものだ。

その動物園が昨日、閉鎖されてしまったのだ。原因は件の虚数空間である。この世界を少しずつ、確実に飲み込み続けているそれは、事故が歴史となった今でも、こうして俺たちの、人々の思い出の地を飲み込んでいくのだ。境界面から十キロほどは立ち入り禁止とするという政令の元、範囲内となったあの動物園も閉鎖される段となった、という訳である。

「いつかは来ると思ってたけどなあ」

「ねー。なんというか、納得できないよねえ」

動物園の閉鎖が決定した際、そこにいる動物の処置をどうするかという議論は、前々から続けられていた。ほとんどの動物は他の動物園への移送が決定していたが、ヤッシーをはじめとする幾つかの動物たちが、行き場をなくしてしまったのだ。

その彼らの処置が、今日のニュースで報じられた内容であったのだ。そしてそれは、とても残念な結果に終わったのだ。

電車に乗って、街の駅で降りて、彼女の家の前まで向かう。

「今日もありがと、また明日ね」

そう言って玄関へと消えていく後姿。ポニーテールは揺れていない。果たして、それはいつも通りの光景だった。日常。普段と同じ。

貫くような日差しが、頭の上をじりじりと焼いている。汗が額を伝って目に入りそうになる。

少しだけ傾いた日を、思い切って見上げる。途端に目を瞑ってしまった。なんて眩しいんだろうか。直接みるだなんて、とてもじゃないが出来やしないじゃないか。

ドアが、ぱたんと閉まった。当たり前前のその光景が、なんとなく寂しい。

ああ、なんだかんだでこの関係が怖いのだ。安定しすぎているのだ。膠着状態といえいいのだろうか。流動性の無い生活。漠然とそんな気持ちになる。

「何を考えているのか」

そんな、日常に飽き飽きだなんて。安っぽいライトノベルの主人公みたいなことを考える暇なんてあるのだろうか。

だが、日光は未だに照り付けている。変わらずに目に刺さる光。

「……帰るか」

空は、もう夏だ。

「それは事実なのですが、ジェフエリー所長」

返答の言葉はシンプルだった。

「勿論です。博士」

にわかにざわついた室内が、静まり返る。それほどまでに彼の発表は衝撃を伴っていた。

右手を口元に当て、額に皺を寄せた妙齡の男は言う。

「これは、あまりよろしい事態ではないな」

「ええ、確か臨界値が150、でしたよね。それを優に超えている隣に座った白衣の女性が手に取った資料を指差し、言葉を添える。」

「それに見てください、微振動数が明らかに増えている」

「この地点でもだ！こんなこと、今まで無かったぞ！」

堰を切ったかのようにあふれる言葉の応酬、その一つ一つに共通した感情がある。

焦り。

次第に大きくなっていく声。荒くなる語気。

「なんとということだ、これはつまり——」

「おお、神よ……！」

「畜生、なんとということだ！」

頭を抱える者。天を仰ぎ神への祈りにすぎる者。この事態を引き起こした何者かへの呪詛を呟く者。

彼らは全て、科学者であつた。

一人の男が席を立ち、ある場所へ向かう。

蛍光灯が照らす会議室。騒然とした室内で一人、超然とした態度をとるその人の場所へ。

「ジェフエリー所長」

所長と呼ばれた男は、白い顎鬚をゆっくりと撫でながら振り向く。

「何だね、耶麻博士」

瞬間、見つめあう瞳。鋭い眼光が飛び交う。

「……」

沈黙は続く。その間も、周囲では大騒ぎが続いていた。

やがて、フツと力を抜いたのは博士の方だった。キャスターの付いた椅子にもたれたまま後ろに動き、足をゆったりと組んだ。

「……ふむ、確かに、君が以前主張した通りのことが発生しているな。一ヶ月前、だったかね」

耶麻は、目の力を緩めない。

「以前にも、関連の論文は発表していましたよ」

耶麻は博士の言葉を訂正し、さらに付け加えた。

「さらに、その対策の仮説も提唱したつもりですが」

蛍光灯の光がチラつく。ジジジという音が耳障りだった。

博士の背後に映る文章。その題名はこんなものだった。

「日本国東部に存在する虚数空間の活動活発化について」

三話

「おはよ」

「ああ、おはよう」

日はまた昇る。それは至極当然のことである。そうして訪れる今日という日もまた、当たり前に来るものなのかもしれない。

だからこそこうして、いつもと変わらず彼女の家の前に着いたのだから。

「あのね」

横目に揺れるポニーテールを眺めながら駅への道を進むと、彼女が唐突に話を振ってきた。

人工物に溢れたこの街でも、蝉はしっかりと生きている。アブラゼミやらクマゼミやらの類がそこら中の木々に止まっては、騒々しく求愛の音をがなり続けているのだ。

だからこそ、どうしてなかなか話半分ということが出来ない。相手の言葉を捕らえようと思ったら、真剣に耳を傾ける必要があるのだ。今回もその例に倣って、彼女の言葉に集中する。

「……」

しかし、言葉は続かなかった。まさか、蝉が真横にいる人の声すら聞き取れなくなるような騒音レベルの音を発しているというのだろうか。彼女の顔を覗く。

その表情は、何か思案をしているような顔だった。うつむき加減のその面持ちは、決して明るいものではない。

「なあ、どうしたんだ？」

心配になって声をかけてみる。返事は望めないが、なんとも気がかりだ。すると想像とは裏腹に答えが返ってきた。

「うん……。あのね、今朝、お父さんから変な電話が来たの」

「変な電話？」

思わずオウム返しをしてしまった。だが、一体それはなんだというのだろう。

「それがね、ただ一言、『気をつける』って」

なんじゃそりや。昔からどこがおかしなところがある美知の、いや彼女の父親だが、まさか朝に突然そんな妙な電話をするほどだなんて。それとも時差のことが飛んでいたのだろうか。

しかし本題はここではなかった。一呼吸入れた後、彼女はさらに気になることを述べた。

「でね、それを聞いたお母さんが、なんか変に慌ててね。暫くしたら落ち着いたけど、すごく疲れたみたいだった」

「そりゃあ、なんというか、すげえ怪しい」

幾らなんでも怪しすぎる。慌てたって、何故？「気を付ける」という言葉に、そんな意が介在する余地はあるのだろうか。全く持つてこいつの家は良くわからない。

「良かったの？本当に行かせて」
リビングに置かれた電話の受話器を取りながら、耶麻美恵子は尋ねる。

『ああ、別に事態が本当に発生するかどうかは判らない。それに、もしそれが発生したとするなら』

電話の相手は含み笑いをしながら答える。

『彼女の好きな人と、一緒に過ごさせたほうが良いんじゃないか？』

「わたしだって、あの子と最後、過ごす義務があるんじゃない」

『だって、止めなかったんだろ？』

その言葉に、彼女は荒いでいた語気を弱め、笑顔になる。

「それがだってあの子すごいよ？この前部屋の日記覗いてみたら、もう毎日毎日愛を綴ってばかりで」

『おいおい、美知が聞いたら怒るぞ？』

「大丈夫よ。バレるような失敗はしないから。それにしても、感慨深いなあ」

『もうかれこれ１７年か？それでまだ告白して無い、ってんだからな。あいつも中々罪な男だ』

「あら、それはあなたもよ」

「え？」

会話が止まる。彼女の中に、唐突に激情が流れた。いけない、そう思ったときにはもう遅かった。奔流が止まらない。

「だって、だって！もう終わりかもしれないのに！もう会えないかもしれないのに！どうしてそんなに冷静なの！？どうして、こんな時に傍に居てくれないの！？」

「……美恵子」

「なんで？なんで突然！何が『お終いかも知れない』よ！それをなんとかするために頑張ってたんでしょ！！どうして諦めちゃうの！？」

「……すまない」

「……っ、うつ、んえ、ひつ、あああ、あ」

止まらない涙が、床に溜まる。

「……」

相手は、何も言わない。それが堪らなく辛い。電話を通じてすら、相手を感じることが出来ないのだ。

ああ、そうなのだ。「発生するかどうかは判らない」、という言葉は、きつと嘘だったのだ。

『いや』

唐突に、言葉が聞こえた。ハッと、顔が上がる。

電話の相手は、言った。

『俺は、諦めていない』

結局その日は特になにも無く放課後になった。そう考えるとテストがあつた分、昨日の方が異常だったのかもしれない。

蝉がうるさい道を進み、駅へと向かう。途中のコンビニで買ったアイスを食べながらホームの端で電車を待っていた。

「それ、何味？」

唐突に彼女が聞いてくる。

「チョコミント」

そう答えると、彼女はうえ、と言いながら自分のアイスへと視線を戻した。

「……おい、今の何だよ」

チョコミントという名を聞くなり目を背けた。それはつまり、まさか。

「あたし、チョコミント嫌い」

「ふざけるな」

あまりにも聞き捨てならない台詞だった。チョコミントが、嫌い？ そんなことあつてはならない。あの爽快感満載のミントと、ひんやりカリカリのチョコレートとの、絶妙なハーモニー。あれを「嫌い」の一言で断じるなど、あつてはならない。

さては。

「はーん、さては『なんか歯磨き粉みたいな味だから』みたいな訳の判らんことを言っている口か？」

そう言つと、彼女はむっとして言い返す。

「別にそういうわけじゃない。それにチョコミント食う方がその理論より訳がわからないし」

ふむ、どうやら違うらしい。ならば、何が問題だというのだろうか。

「ただの、食わず嫌いよ」

「お前、そりゃよくねえよ」

これは一体どういうことなんだ。この子はそんなしつけのなっていない子だったのかしら。

「つとと」

流石の暑さだ。少し目を離しただけでもうアイスが溶け始めている。急がなくては。

「ふぶふおっ!？」

これは彼女が口の中にチョコミント味のアイスをつつまれたときの音である。正確には滑り込んだ、だろうか。ちなみに棒はすでにはずしてある。念のためだ。

「ふよっほ、ひゃんてほほお!」

何やらわめいているが、仕方の無いことである。異教徒に対しては改宗の余地を与える。これこそが理性的な信者の姿というわけだ。ただし、世の中には等価交換の原理というものがある。俺は彼女に食べかけとはいえアイスをあげたのだ。代金はしっかりと頂かなくてはならない。

と、彼女の右手に握られたソフトクリーム。あれなら大体同じかな。「ふあっ!」

鮮やかに奪い取ったソフトクリーム。彼女の視線を無視して、そのまま口の中へ運ぶ。

「ふぶ、おいひー」

そういつて彼女の方をみると、振りかぶった右腕が見えた。

「あっ」

最後尾の車両はガラガラで、向かい合わせに並んだシートは丸々一つ空いていた。

ちなみにこの時間帯は特に乗り降りが少ないため、終点である我らが街の駅までこの状況は変わらない。

彼女は怒っているのだろうか。ずかずかと車内の廊下を後ろに後ろにと進み、長座席の端に座る。

刺激するのは得策ではない。そう考えて俺は同じ座席の反対の端に座った。

やがて電車は発車する。向かいの窓に映る顔を見て、ふと頭上に意

識が向かう。

そつと乗せた手が感じる違和感。たんこぶだった。

全く持つて、彼女の腕っ節は強い。強いのはそれだけではないのだが、やはり運動神経の良さは多分に関係しているのだろう。

と、先ほどのやり取りを思い出す。彼女とのこうしたやり取りは、週に一回くらいのペースで行われている。

仕掛け人は大体交互となっているが、お仕置きを食らうのは決まっています。ああ、なんということだろう。

そういえば、さっきのは間接キスになるな。だが、それは今や大きな刺激では無い。もう遠い昔とはいえ、一緒に湯船に浸かった関係なのだ。いまさらこの程度何というのだろう。そのかわり、これ以上の関係には進めないのだ。それが幼馴染というものの宿命。ああ、違う。

そう考えてみたは良いものの、どうにも歯がゆいのは間違いない。そもそも宿命ってなんだよ。幼馴染という立場がそんな恒久的なものでない、ということくらい考えておくべきではないのか。

そうだ。彼女との関係は永遠ではない。いつか、終わりが来るのだ。それを無視して、盲目的にのりくりりと日常を消費していく。果たしてそれが許されるのだろうか。

悩む。変わらなくては、いけないのだろうか。分からない。

そのまま何となく、世界が暗くなってしまったような気がした。

四話

——暗く？

本能的な恐怖というのは、その対象がどれ程強大な「敵」であるかを如実に伝えてくれるものらしい。一瞬で背中がゾクリ、と震える。鳥肌が生じたのは右肩。首が、右に曲

がる。

窓の向こう側。

それは、闇だった。

「……え？」

状況に思考が追いつかない。

アレはなんだ？ そりや虚数空間だろう。あんな禍々しいものはそれ以外浮かばない。

何故あんなところに？

それは、わからない。

どうして今？

わからない。

どうして俺たちが？

そんなの、わからない。

しかし、脊髓反射なのだろうか、体は既に動き始めようとしていた。一刻も早く、あの波のように迫る黒から遠ざからなければならぬのだ。

「逃げるぞ！」

バネのように跳ね上がった体は、彼女の方へと真っ直ぐに。

「へっ！？な、何？」

こいつ、どうやら寝ていたみたいだ。危機感受能力つつもんがなののか、全く。

が、そんな悠長なことを考えている暇は無い。今はとにかく逃げなくてはならない。

「後ろ見る、電車の後ろ！」

俺の言葉を受けて、ようやく後ろを見る美知。ぼーっとしていた顔が、呆然とした顔に変わった。

「……嘘、あれって」

そのとき、天井のスピーカーから放送が流れる。

『えー、ただいま電車外にて緊急のトラブルが発生致しました。大変申し訳ありませんが、お客様方は至急電車の前の車両の方に移動して下さい』

伴って速度を上げる電車。このまま逃げ切る算段なのだろうか。普段のモーター音よりも大分騒がしい。

見れば、この車内で事態を一番近い場所で見ている人。つまり最後尾の運転席でマイクを握る車掌の姿が見える。果たして、逃げなくて大丈夫なのだろうか。

といっても、この電車はたったの6両。先頭といたってたかが知れている気がする。だが、それ以外に手立てが無いのも事実。次の瞬間には、体が素粒子レベルで分解されて

しまう可能性すらあるのだ。咄嗟に彼女の手を取り、立ち上がるように促す。

「っ！ご、ごめん」

唐突な謝罪。直ぐにはその意味は判らなかった。が、彼女の足を見ると、理解は安易となった。

「すくんじゃたのか」

その言葉に対して、彼女はコクリと頷いた。仕方もない。今まで遠くでただ存在していただけのものが、今まさに命を奪おうと襲い

掛かってくる。

どうする？彼女を置いて逃げることなど出来る訳がない。美知は間違いない、失うことなど出来ない大切な存在なのだ。

そうだ、負ぶってでも逃げよう。不意に思いついた。ああ、なんて簡潔な答えなのだろう。こんなことにも気がつかなかったなんてパニックというのは全く碌なことにな

らない。だが、そう決めたなら後は早い。

「乗れ、美知」

美知の前で屈んで、背中を見せる。おんぶをする体勢になったのだ。

「いいの？」

「いいから早く！」

視界の端に映る黒が、その勢いを増したように見えた。そんな、この電車だつてそれなりの速度を出しているはずなのに。

「よい、しよつと」

おずおずと背中に乗る美知を、両足を使って支える。

「重くない？」

と聞かれたが、まったくもってそんなことはない。彼女は軽く、そのままだどこまでも行けそうな程だった。

一歩ふみ、二歩踏み。ゆっくりとだが前へと進む。美知が心配そうに言葉をかけてくれたが、そこまで心配することではない、多分。だが。

『繰り返します、ただいま電車外にて緊急の事故が発生しました、お客様方におかれまして――』

突然ぶつり、と切れた。なんだ？何かあったのだろうか？

「――あつ」

振動も、音も無い。

あるのは、ただ破壊のみだった。

電車の後ろ半分が、丸々飲み込まれた。

それはつまり、電車よりも穴の拡大速度が速いというわけで。

こみ上げてくる吐き気。目の前で、人が消えてしまったのだ。どころか、自分がこうしてと通り過ぎていく民家に住む人々も、ああ、消えてしまっているのか。

そして、果たして次は、誰の番なのだろうか。

ただ、前へ。前へ。進み続ける。怖い。恐い。糞、クソ、くそ、
「クソッ！」

ガタン！、と一際大きな揺れが来る。よろめく体。背中の美知は、何も言わない。

それでも進む。進む。進む。

モーターの音がひたすらに鳴り響く。制限速度など、とつくに過ぎているのだろう。

それでも、穴との距離は広がらない。

畜生、何両分進んだ？あと何両あるんだ。こんなチキンレース、いつまでも続くもんじゃない。そもそも、カーブが路線にあった時点で、距離が詰められて終いじゃないか。

答えは直ぐに分かった。次の車両には、まばらにだが、確かに人が居る。その先に通路があるようには見えない。どうやら、終点のようだ。

そんな彼らの表情に共通項があるとすれば、その表情だった。はつきりとした、絶望。それが全てだった。

じりじりと、前へ、前へ。もうそれしか考えられない。その瞬間だけ、確かに俺は美知のことを失念していた。一步一步の重さは、間違はなく物理的なものではない。圧倒的なプレッシャー。噴出す汗。背中、無音。あと五歩、あと四歩。それは喜びでも、悲しみでもない。これは、なんなんだ？生存本能？条件反射？わからない。どうでもいい。

最後の車両に辿りついた。もう逃げ場は、無い。どくり、どくりと鳴り響く鼓動。頭の中は真っ白だ。美知を席に着かせ、後ろを向く。

黒壁から、離れていく。

助かった。

助かったのだ。

俺は、生きている。

すぐさま、隣に居る彼女へと声をかける。

「おい美知、助かったぞ！」

返事は無い。見るに、息はしている。失神をしているようだ。

「おいおい、恐がりすぎだろ、まった」

く、までは言い切れなかった。それは、彼女の一部分に目がいつてしまったからだ。

それは、俄かには信じがたい光景。

それは、ありえないはずのことだった。

それは、足だった。

美知の足が、消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3211v/>

ブラックホール・ダウン

2011年10月8日21時48分発行